



編集・発行

大阪府立

呼吸器・アレルギー医療センター

大阪府羽曳野市はびきの3丁目7-1

TEL: 072-957-2121

FAX: 072-958-3291

HP: <http://www.ra.opho.jp>

E-mail: kokyucen@ra.opho.jp



シーズンのインフルエンザ対策

臨床研究部主任部長 はしもと 橋本 しょうじ 章司

インフルエンザは冬季に小児を中心に流行する呼吸器感染症で、感染者のくしゃみなどのしぶき（飛沫）に含まれるウイルスを吸入し、1～3日の潜伏（ウイルスが鼻・咽頭の粘膜で増殖）後に発熱や全身筋肉痛、関節痛で発症します。典型例では発症12～18時間後にくしゃみ（鼻）、咽頭痛（喉）、咳（気管支）の3症状が加わり、発熱・全身痛はまる3日、3症状はまる5日で消失します。

従来のAソ連型に代わり2009年から2年間は新型ブタインフルエンザが大流行し、小児の脳症や青年での肺合併症（ウイルス性肺炎や急性呼吸促進症候群）が問題となりましたが、以後は季節性のA香港型（A/H3N2）とB型が流行しています。

季節性インフルエンザで最も重要なことは、高齢者やCOPD（タバコ肺）などの基礎疾患をもつ方が感染した場合に、元から気管支に保菌していた肺炎球菌が重症の肺炎を起こし、毎年約1万人の方が死亡されるということです。この予防には、5年毎の肺炎球菌ワクチンで気管支の肺炎球菌を除菌し、毎年冬のインフルエンザワクチンでインフルエンザを抑ええるという二段構えと、早期の抗インフルエンザ薬の開始が重要です。

また今春には中国での新型トリインフルエンザ（A/H7N9）の流行が問題となりましたが、世界保健機構はマスク着用に加えてその感染予防に帰宅時などの手洗いを強く推奨しています。



さあ、以上に注意して、今シーズンも乗り越えましょう！

気管支喘息とアレルギー性鼻炎

アレルギー内科主任部長

みなもと 源 せいじろう 誠二郎

気管支喘息は、吸入ステロイドの普及によって、死亡者数が順調に減少して、2012年には、1874人となりました。実際に、喘息発作での救急受診や入院は非常に少なくなっています。しかしながら、気管支喘息のコントロールに悪影響を及ぼす要因は多くあります。以前に、紹介させていただいた喫煙はその一つです。今回は、アレルギー性鼻炎との関係を書かせていただきます。

気管支喘息とアレルギー性鼻炎は、どちらも気道の粘膜の炎症によっておこる病気で、病気の場所は違っていても、アレルギー性炎症を起こす好酸球が粘膜内に増加していることや、粘膜がわずかな刺激で浮腫んだり、分泌物が増えたりして敏感になっているという共通点がみられます。実際にアレルギー性鼻炎の患者さんの約40%に気管支喘息が併発し、逆に気管支喘息の患者さんの約80%にアレルギー性鼻炎が併発していて、密接に関連していることが知られています。また、気管支喘息の患者さんの鼻粘膜には、アレルギー性鼻炎を発症していません。

ても好酸球が多く集まっていることも分かっていますし、逆に、アレルギー性鼻炎の患者さんの気管支粘膜にも喘息の症状がなくても好酸球が増加しています。このように、炎症が起こる場所は異なっても、それぞれの病気はお互いに影響を及ぼしあっています。最近、この2つの疾患を、「one airway, one disease」として一つの病態としてとらえて、単に気管支喘息の治療だけでなく、アレルギー性鼻炎を合併していれば、その治療を積極的に行うことが、気管支喘息のコントロールに大切だと分かってきました。当科でも、アレルギー性鼻炎の治療を併用することで、気管支喘息のコントロールが非常によくなったという患者さんはたくさんいます。このように、本来の気管支喘息の治療に加えて、悪化要因を除外していくことが、より良い喘息の治療として大切です。

<看護部 誠意と温かみのある優しい看護を目指して⑩>

5B 病棟

5B 病棟は循環器内科と呼吸器内科の病棟です。循環器外来をはじめ、狭心症のおそれがあり、冠動脈 CT や心臓カテーテル検査が必要と診断された患者さんの検査にも、5B 病棟の看護師が対応します。

心臓と肺は切っても切れない仲。心臓が悪くなると呼吸にも負担がかかりますし、肺が悪くなると心臓にも負担がかかります。手術をしてすっきり治すことができればよいのですが、食事療法や薬を継続して服用すること、時には自宅で酸素吸入を行うことも必要となります。

5B 病棟には、慢性呼吸器疾患と慢性心不全領域に一名ずつ認定看護師がいます。この認定看護師といわれる看護師は、半年間専門知識の講習と他の医療機関で研修を受け、認定試験を合格した看護師で、より専門的なケアを患者さんに提供できるように配属されています。病棟勤務をしながら、時々循環器外来の勤務もしています。患者さんやご家族からの病気に対する相談や、療養に関して困っていることや悩んでいることなどのお話をうかがい、一緒に対策を考えています。その他にも、在宅用のマスク式人工呼吸器などに関する専門的なアドバイスや介護サービス・訪問看護の導入や連携にも力を発揮しています。そういった患者様の治療から在宅療養まで、患者さんの望む医療・看護が提供できるように、認定看護師を中心に病棟スタッフ一丸となって頑張っています。



11月の教室案内

*カンガルー教室	●	11月6・13・20・27日	午後1時～	第1会議室
*禁煙教室	●	11月7日	午後3時30分～	医療情報J-ナ
*喘息教室	●	11月21日	午後2時～	第2会議室

【これから皮膚科外来を受診しようとする患者様へ】

皮膚科外来は、これまで大変混み合っており、特に初診の患者様に長時間お待ちいただく場合が増えております。

当センターはアレルギー性皮膚疾患などの専門医療機関であり、他の診療機関では治療が困難な重い症状の患者様に対して重点的な治療を行っていくことが当センターの役割と考えております。

こうした状況に鑑み、平成25年11月1日から、皮膚科外来におきましては、初診の対象を、「他の医療機関からの紹介状をお持ちの患者様」のみとさせていただきます。

ご理解・ご協力の程よろしくお願いいたします。